

早稲田大学 国際教養学部 古文 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式
試験時間	60分（現代文2問、古文1問）
出典	『増鏡』 第十六「久米のさら山」
解題	十四世紀後半成立。歴史物語。

〔大問別講評〕

大問番号	設問番号	コメント	難易度
(三)	問十二	〈内容把握〉 傍線部直前文の「験」の語意が問われている。「験」は仏法の効験、すなわちイの「祈祷の効き目」に相当する。	標準
	問十三	〈語彙〉 2の「ばや」は願望の終助詞。イ・エのうち、イは「～だろう」の推量表現が余分。	平易
	問十四	〈文法〉 a・dの二つ。完了の助動詞「る」（終止形「り」）の接続は、サ変の未然形または四段活用の已然形であることより、「る」の直前の語の母音が〔-e〕であるものを選ばばよい。	平易
	問十五	〈内容把握〉 「宮こ」は「都」。「なる」は伝聞推定。二文前の「書くべき者のなければ、～行房中将をや召し返されましなど、定めたまふ」を指す。	標準
	問十六	〈内容把握〉 直後の「時雨」から。	平易
	問十七	〈敬意の方向〉 イは「召し」の行為の主体、この場面では行房を呼び返そうとしている京の朝廷方に対する敬意を表す。他は後醍醐帝への敬意。	標準
	問十八	〈内容把握〉 「かかる御有様を見置き～いで帰らん」の大意は「このような後醍醐天皇の悲しいご様子をお見捨て申し上げながら、どうして京に帰れようか（いや、帰れない）」となる。イ・ウは論外。エでは主君への思いが表れていない。	標準

〔総合コメント〕

<b>難易度</b>	平易～標準。04・05年度よりはやや難化してはいるが、しかしそれでも基本～標準的な学力で解けるものである。
<b>分量</b>	増加。本文の長さは04・05年度の約二倍。設問数は七問で、二問増。
<b>形式</b>	04・05年度と出されていた脱文・空欄補充の問題が無くなり、逆に過去に出題の無かった文法・敬意の方向を問うものが出された。
<b>傾向と対策</b>	<p>過去二年と比べて出題内容は変化したが、決して独特なものではなく、一般的な受験古文の学習をしていた受験生にとってはむしろ解き易くなっていたものと思われる。</p> <p>問十四の文法（「る」の識別）・問十七の敬意の方向は近年のセンター試験で出題されていることに留意したい。センター試験の過去問や受験頻出の文法問題は確実にマスターしておく必要がある。</p>